

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题用紙に書くこと)

世界は配置 (disposition) であり、人間は自らを取りまく配置によってたえず態勢づけられている (disposed)。デイスポジション (disposition) という語は、特定の学問領域における中心的概念として機能してきたものではなく、むしろ英語においても仏語においても日常的に用いられる言葉である。しかし、それと同時にデイスポジションは、さまざまな領域のテキストにおいて、まさに領域横断的に見出され、ある共通の展望を拓いてもいる。その展望とは、⁽¹⁾ いわゆる近代的 세계観とは別の可能性の提示にほかならない。

デイスポジションの語源である、ラテン語の *disponere* という動詞は、分離を示すセツトウジ *dis* と「置くこと」を意味する *ponere* によって構成されている。距離をあげて置く、すなわち「配置」がこの語のもっとも古い意味である。ここから事物を配置するための行動や能力、配置されるための条件といった意味、さらには、ある行為や状態に向かう性向・傾向性・態勢といった意味が生じてきた。

デイスポジションは、世界を様々な諸要素の「配置」として捉えることを可能にし、また、人間の行為や自然物の性質を「習慣づけ」や「能力」という観点から捉えることを可能にする。これをまた別様に言いかえるならば、この概念は、世界を存在者同士の関係として捉えることを可能にし、また、その関係によって生じる「力」や存在者が帯びる「傾向性」に光を当てる。こうしたデイスポジション的な世界理解に対置されるのは、世界を認識主体の構成物あるいは表象として捉える近代的な世界観にほかならない。この意味で、デイスポジションは、いわゆる「自我の形而上学」に対する批判的視点を構成すると言える。そして、もし私たちが、人類の精神史を古代から参照しなおすならば、実に世界を「配置」として捉える思考方法が中心であった期間は、世界を認識する意識的な「主体」が幅を利かせている期間よりも、ずっと長いことに気付かされる。

デイスポジションは、明晰判明な主観を基盤とする世界観とは異なる仕方世界を描き出しうる。こうした展望を獲得した際に、⁽²⁾ 筆者が夢想したのは、うまくいくこと (going well) をこの概念によって生け捕りにすること

とであった。「うまくいく」は非人称的である。「うまくいく」は、その一連の流れにどのような形であれ参与している複数の存在者たちの「うまくやる」と無関係ではないが、少なくともうまくいつている時、私たちは人称というものを意識しない。こうした非人称的な「よく」(well) が成り立つとき、一体なにが起こっているのだろうか？ とある場所に複数の存在者がいる。⁽³⁾ その複数の存在者と適当に快適であるためには、「愛」という情感たつぷりの概念が示す実践はおそらく不適當である。とりわけ子供や動物といった敏感な存在者に顕著なことであるが、強いインテンションの媒介は、むしろ存在者を緊張させ、ぎくしゃくさせることがある。「責任」や「共同性」も、同様の意味で、強すぎるかもしれない。「愛」や「責任」や「共同性」などの強い概念を用いずとも、ちよつとした気配りや配慮によつて、複数の存在者たちの共存がうまく立ち行くことを、私たちは経験上よく知っている。私たちが意識化することも容易ではないような仕方、つまり極めて適当に「氣」を配ったり、「思い」を遣^やつたりすること。ここから倫理や美学を考えることはできないだろうか。

たとえばサッカーのプレイにおいては、複数のプレイヤーたちが「うまく」ボールを運ぶときに、ボールの移動は全体としてうねりをなす。このうねりは、ボールをまわす時の、個々のプレイヤーのある程度の「氣」遣^{づか}いによつて実現している。ボールへの接触の強弱は、ある程度の「氣」遣^{づか}いによつて調整されなくてはならない。ボールに向かつて走りこむ誰かもまた、走るスピードの緩急を、あるいは足の出し方を、今ボールを持っているほかの誰かの動きを感じながら調整するだろう。この調整を実現している配慮とは何だろうか？ あるいは、ある曲を複数の人間で演奏している最中に、ある人間が他の人のリズムや音色を感じながら、自分のパートを演奏し始める瞬間の気遣いでもいい。もしくは、見知らぬ子供同士が砂場^{すな}でソウゲウ^{ソウゲウ}した際に、たいした話も交わさぬまま、一緒に砂をほじくりながら、ときには道具を貸し借りしながら、うち解けてゆく際に、彼らがしている気配りのようなもの。⁽⁴⁾ こうした配慮とも呼べないような配慮、「氣」遣^{づか}いは、おそらく理性的な判断や意識に還元されるものではない。

こうした気遣いや配慮の前提となっているのは、自分以外の存在者(たち)が生き、運動し、活動していると

いうことであり、それと同様に自分自身もまた生き、運動し、活動しているということである。つまり自分も動いているということを前提としつつ、相手の動きに合わせてゆく、あるいはその逆の実践がここにはある。互いに活動する存在者同士においては、主客も能動受動も容易に入れ替わり得るだろう。競馬の騎手、福永祐一は、馬と騎手の関係について、大変興味深いことを述べていた。騎手には、馬の力を一二〇パーセントにすることはできない。馬に騎手が乗った時点で、騎手は馬に対してマイナスにしか作用しない。だから、騎手にできることは、そのマイナスをできるかぎり少なくすることなのだ。「うまくいく」ために活動している存在者同士の関わりとはまさにこのようなものかもしれない。自分の関わりなしで世界は一〇〇パーセントのポテンシャルを持っている。この一〇〇パーセントの活動可能性をいかに一〇〇パーセントにしようか。「うまくいく」ことを目指す存在者は、互いにそのような態度で接し合う。そこで問われるのが、活動しているもの同士の配置、距離、関係である。騎手はもちろん減量もするだろうが、大切なのは言うまでもなく、馬の姿勢に対する騎手の姿勢であり、馬の運動に合わせた体重の移動だろう。この配置が、その都度その都度、何らかの仕方ですべて、関わりの程度が、一瞬のうちに決定される。

この関わりの「程度」は完全に数値化できるものではない。そして既存の概念もまた、なかなかこうした「うまくいく」ための関わりを十分には言い表してはくれない。「調和」「統一」といった概念は、美学的でもあり倫理的でもあるが、いずれにしてもこれらは、全体において成し遂げられた構成に向けられた概念であり、あれとこれが「うまくいっている」ことを示すには不十分である。こうした事実を前に、「うまくいく」を言語化不能なものとして認識の外部に置くのは、あまりにも口惜しいように思われる。確かにうまくいかない事態、しかもうまくいく可能性すら見出せない事態は、枚挙に□がない。しかし、このたくさんのうまくいかない状況にも拘わらず、私たちは、あるいはサッカー選手たちや演奏家たちや子供たちは、あるいは馬と騎手は、確かに「うまくやってきた」のである。あたかも、蘭と自らの使命を知らずに蘭の受粉を手伝うスズメガのように。

(5) ここには希望がある。

かつて、倫理は、先ほど述べたようなさまざまな「強い」概念によって語られてきた。このように強い概念が必要とされたのは、倫理の担い手として、「主体」や「意識」や「意志」といった強い概念が前提になっていたからである。世界を回収する自己認識や主体を前提とする限り、「うまくいく」はこうした強い概念を逃れて、生活の内に留まり続けるだろう。「うまくいく」は、認識する主体や意識に先行する、生き生きと活動する存在者たちを前提とするのだから。これまでの概念体系では捉えられなかった「うまくいく」は、幸福な倫理の可能性であり、それは、まだまだ十分に言葉を与えられていないわたしたちの経験やその記録のうちにこそあるのではないか。少なくともそのように信じることから始めてみたい。

この先、ここで「ディスポジション」と呼んでいる力関係は、より具体的に手触りのある表現を獲得し、また、「主体」と呼ばれてきた自己意識は、様々な力関係の中でたえず新しく態勢付けられる生の担い手へと姿を変えることだろう。その結果、私たちは、従来の倫理や美学が成し遂げたのとは別の表現で、おそらく概念と表現がフック不離になるような仕方、「うまくいく」ことについて語ることが可能になるかもしれない。もはや倫理や美学という大袈裟な名称も必要としない、ただ「うまくいく」ことの可能性が、垣間見えるかもしれない。

(柳澤田実「馬に乗るように、ボールに触れ、音を奏でるように、人と関わる」による)

問

(A) 線部(イ)のハを漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 線部(1)について。「いわゆる近代的世界観」とほぼ同様の内容を表している一続きの部分を、本文中から抜き出し、十五字以上二十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(C) 線部(2)について。ここでいう「生け捕りにする」とはどういうことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 認識主体の構成物として捉えること。
- 2 生き生きとした動きを想像すること。
- 3 無意識に行われる配慮を意識化すること。
- 4 手触りのあるかたちで表現すること。
- 5 変化する関わりを程度を数値化すること。

(D) 線部(3)について。「不適當である」理由として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 お互いに活動する当事者たちの気配りを困難にしてしまうから。
- 2 「責任」や「共同性」という概念を同時に用いられなくなるから。
- 3 愛する対象以外の存在が自分の意識の外部に置かれてしまうから。
- 4 共に活動している相手の力がプラスに作用してしまうから。
- 5 当事者たちの能動受動の関係が容易に入れ替わってしまうから。

(E) 線部(4)について。この説明として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 相手に対するマイナスを、可能な限り少なくするように努めること。
- 2 相手が言葉を発しなくても、その思いを常に自分が意識すること。
- 3 活動中の動きの主体を、自分と相手で交互に入れ替えること。
- 4 自分と相手との距離を常に測定し、関わりの程度を決定すること。
- 5 意識的ではないが、極めて適当な気配りによって調整すること。

(F) 空欄 にはどんな言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 遑いと
- 2 隙ひま
- 3 曲まが
- 4 類るい
- 5 例れい

(G) 線部(5)について。「ここに希望がある」理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 これまで説明できなかった関わり「程度」を数量化することにより、「うまくいく」を語る可能性があるから。
- 2 従来の美学や倫理学の概念が、「配置」の概念により新しく態勢付けられ、「うまくいく」を説明できる可能性のあるから。
- 3 意図しない形で「うまくやってきた」事例が既にあり、そこから「うまくいく」を言語化する可能性が与えられているから。
- 4 「うまくいく」は近代的世界観では捉えられない存在者たちを主体とするため、今後も消滅することがないから。
- 5 「うまくいく」を説明できる可能性がある学問は、従来の美学や倫理学以外にも無数に存在しているはずだから。